





序



思ふにふかしく入はるるのちろけよりと
 まかりして留まかしく一日杖をぬて菴を
 尋ねたりしふ母頃池魚の災よりしては
 所志とくくの宿ぬの涼けふ住ふ病
 床に簟を敷て吊るゆけと一名の木
 とり出さくゆまあとかたなやその中
 心つらひくをわらふなき世師かく涙をろく

をうらむれり病病ふんやよりくんよひとち
泣枕を浮くらうあつたをさむく慰めし
らへくれと氣力いれくらう述例の俳諧の雑
談樞要と語出と須臾のふりあめ倫ふまを
採せ九節の一句を話して謂ふくらう惡の
くら言ぬら生前六十余年此道に執深く
侍りしを哀令且々ふ遍り心をころり
ころくし思ひぬらきひれきては一句ふれ

千萬の心を本傳にかつてもいふらや
くら侍ま令統のはは是とてお辞世ともえよ
おし教たのき事ともえははにせくらう狗と志の
くらやうの侍りくらうてお歎涙不汗取
をきつ浸とられら唇舌の乾きを煎湯
らほら多留偏易難の両方子と枕お近く
啼あろく云出せおきけよ世二人の建とら中
倫其業と立ち侍りれ其道いましておあり

難をくわふ禁をゆるぎ義を志しんば
今やん世者ともう験の内ふん
執のいつれ侍た夕那ふも烟と成りし
いさめの鞭を加へてめとふ折
五のくふかへ道ふとつら
立交たやふ毎の侍らと今の命生
収まる侍らとと志いめた
声うきへりよへい息た
事長くと志め

やふ云孫せまのり道ふ死
とて学ふとんふあふたの師恩
慈惠心肝ふ海へ生涯是を
必忘たましとかなふ袖を
かこりまゝとけいし
と追ふ事い江海ふ涼
螢火ふひとく廣子道の隈く
其草く

と照らんより度量ありふ盡侍奉しと
二十年年の月雪ふむつひたむきおめ
るの葉をうけて句法のおりおの
級五聞ぬくへ一句半偈耳底に何を
踏まへ深き淵いよを死ねく海に高き
峯の腰を押さへといへて嬉しけりち笑
生前ふ面を合まらせ胸にうけ候
竹とて教へせいとあしうふんくたふ

つきぬ眼をうけてうぬぬて被白り
わきやと附白していさう新緑乃
んをこめ却病は起の日を待て必
の一卷小物せんと思す延命を
いのりの験なりて水月十六日の早
且の史海り来ころを胸つらき事
あまぬ 嗚呼 悲哉 欲色二界の快楽乃
天を限あきて知り 襄没の悲ある

生死の友よい會て別やすく輪廻乃
山よふきて舎かり我善師を考ふ
滑稽ふる茶の根を枯し俳諧ふ明鏡
を碎く句作ふ眼目お今更處悼
尔何をせん供佛施僧と肉孫志
いふふ順次解脱之要路ハ俳諧
有ふふまきと彼一粟の奈句哉
初年おわく四句目より綴り終り

一卷とぬし作く須弥の一塊伏く
大海の一滴をよ向る事ありあり

俳老仙

清秋述

巴亥仲夏

清涼云々いせさあまを乃

よまきふ乃をなて

くせむい

御袖の内より 朝鮮の佳み

あまめのを

はらり〜

九節乃人多く刻む雲下の邸 古人 百萬

及^{ミソル}をえせん 苗の・鉢植 清秋

弁ふ苗屋根を録乃車井ふ

馬曳すくく 述教口上

月ふお教膏の志とり乃志なり幕

かふさ家サ録の下あふ米異

法の人息^{ヤスソ}と 政中 菅直の堂

意乃と氣むらを流むる泉

意趣錯入中を扱ふゆり酒
六分一とい圓画乃華
欵帽恙て庵醫拱く暮の風
油ふ揚けし鯛也莖立
山水を厨ふまう守るまはし
松枝彫けて塔をかゝるも
光ふ乳牛の荷足ゆの文字
声く踊る庵れくゆぐ

人々一雜食はるき門の月

+

鑄掛し鑄乃るの編書
母猫のおを依の子りかて
誦といえせぬ傾城乃史記
とてもない命ふかりす仇まらる
雞卵の売仕回し松く
日の光うもみ碓貫乃山廻
盃人よの禪年聞入

黒漆の太刀二振を常尔佩
拾ふ扇を知らず多少
椎柴をわろくねむ草門
むれく鳥乃 鰯シイラ啄む
朝の月穉多の生皮干物
旅の巧者尔せぬ酒前
武家方を馴くつるハ大和鹿
有るといふぬ色の山吹

亡跡尔誰編終ん花乃集
彼山岸 長閑千所この白喫
片ときは漁村乃上平角立て
帆を引廻す人かろり

師又病床中いふ此水毒月の
大をささく細くんをささく
すく乾く果て其幸のや
ぬういさうられ

愛人の部して清くり金の不二 清秋

二七日

日すましく百日紅のふるん哉 全
蓮小居てささくすん念はぬ 如松

思ひ虫を狗の板戸をふり鶴哉 君水
虫干小壺をふり形見の形 大虹

萬師の流の末を汲つる事

二年より一周忌追福の舎

席まつるあいまをうらむ所

行迹はかり物ごとと志きりふ

暮哀の狗をせめて

夏虫の棧よりまよふ一めり 素交

臨終迄き日あてせしむる
終つとあてしむる
つけて終一周忌は悲しむる

聞書より去年のしるし
虫拂 冬野

墓まわり 師の教誨の書
心樹

春帖のふきを
古用子 音社

短あや月の輪珠敷のしるし
北海

古系新系とあてしむる
壺領

蓮歌も七人あつて
持仏堂 石構

その暑のさむさむと
塚の水 山帯

陰涼し在るとき
不佛 閑跡

一燈のよむまわし
かゝる哉 冬霞

若舟の貫一
舟も 金牛

系とまて墓の塵掃け
夏柳 門舟

一めくし
遠く洞やがらみ 萬玉

亡師おーー多敷世を世のまぬ
ー里うかぬ人まじり中ふ敷
君う敷言ちまやまーくらんは
おきぬ千里を遠ーとー終るは
君も又蓬のたふし 障泥をたか
るや終ふまといくと世とやらん
志の敷をままり敷あつますや
ありらんをや一周の長福終る

獨吟の音仙縁ん夜つらき
夕の琴の緒もあつらひ
思ひやう歌の師の後戒
あ歌をあげはるまのつら
あまの風月のまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

ちやえとせふあんがう
あまのあまのあまの
乃今桶をもちあれ
おらう例の高談
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

有るはうらの面影さへおぼひ侍るやうか
おぼゆ顔めは是や生前終りの三吟
お顔を此集りに加へんとははるうり乃
はるあはんともおなきるよまのまて是か
おく書せよとあ顔をよと葉いや
とてむあけやとあはるうりうかおあふ
らんともはるくもあはるうり袖のまはる
侍るよを眼よはるうり袖のまはる

せまあはる思ひ入江のこころをいふ底乃
かくつをかきあつむるあはるちるあはる
舐犢のあはるをうりあはる昔より
今や老牛の足よはる車よを其恩
積るをあはるうりうり塚上よお
とハまけいあはるうりあはるあはる
といつあはるあはるあはるあはるあはる
風吹すさるあはるあはるあはるあはる

あんな竹のさおをねごとくみぢふりー
奉致

冬野

初雪や我より先尔杖の完

吉人

百萬

枯やう途き橋裏乃芦

冬野

松小居る容ふらうも野鷹少く

清秋

陣の茶の湯のお湯油おらす

萬

ふつーま月さまく乃袖日記

野

碓氷路めてきりくを止む

秋

ゆうけい金とんせう秋生あ玉

萬

妻乃子利き小衣故歳ます

野

家思ひ錦うらまへく油まて

田作喜子（シ）伝へ者や歌

志んさすのそつろくろく戸を説き

雨千からうと大道の雲

てつらん千は拭ぬ伊魯保人

於るつろく唄をうたふ年をい

流り猫窓千較あく春の月

女を吹くく白の菜園

秋

萬

野

秋

萬

野

秋

萬

栴流乃茶おき福ふ幕足して

あつろく土を吟りぬ燕

空の飛タあく小居く他歌ん

初イまむる河原乃井垣

浪皮のむけの乳母子の乳母付く

赤込小麻衣（シ）幟尔かき恋

其思ふ栴撫ま歌掛り燈

能い波急せて葛心歌る士

野

秋

萬

野

秋

萬

野

秋

命ある立酒盞乃樓院

法方城ニ集苑山の恰好

夕暮を何小遊らぬ四十藪

賭小梅へ乃下かる月弓

一抱タカへ紅葉を林火大茶藪

ウ 寺領の村のこゝ檀家之

棟上平 天雲のおむ鏡階子

是馴ぬ素袍人先は脱く

萬野秋萬野秋萬野秋

板りの逢玉札を利口さき

暖心魚糸一喜乃本町

花まきき山入のゆるく鹿かけ

根付の舟の雲藪の笛あり

秋野萬秋

夢とま札乃跡や月涼

白頭

師の常平より訓経ひ

神論の点印ふとひま

足なくして先く教もよ

昔原

打ふと交る洞や夏

魯文

俳諧の聲や去るき

翠如

記志志を蝉乃脱や

古来

虫干やせんふふ年

良雨

于氏み頼之甲斐ふ

百宇

墓の蟬鳴あまう

西駝

石葛やまゝ其人乃

二溟

浜深をちうてま

上尺

玉巻く跡もそ

春曙

風蘭子もあ

西湖

り像を織く

蹄香

蹄香ハ聖名宇都宮の

和当りて萬師を志する事
切ありきり終る一因忘と等ぬを
可成ひさくわさく速悼の二句を
易難の許まで駈ぐる境内に
おさやうある蓮池あさく小集に
薫香をさく浄界の導ききそ
ささうーとあるのさくたる

滝殿より又是居く回向の

此外釋

其の歌に奈白書のをとよ向に
麦粉に掩ふ袂を洞の形
去るきぬ後。空やひるぬ織
幻や今と空に 簾
け跡も涼しく照る風月集
声もふき暮や二とや取振る

秋長蘿
浴児
進歩
素琴
木阿
易難

七師の宝舟の流を再び世に流し
都鄙其源をたねきりハ歌に去る年ハ
いふおれもや家俳諧をよむ月ふ
しくて遠く西天の雲を奄を後し今ハ
大空の典の快楽愛蓮臺風よめ偈也
風きん得むとぞすす悲哀の泪を
たふきて一田忘をりよ

湧之勢泉や ぐふ乃の糸 清秋

吸跡白ゆ 清茶と暮切 昔原

普請を大腹中ハ見へぬらん 冬野

所の裾^{カキ}と 條敷暖簾 易難

月夜歌謡正し 松のかしく歌り 君水

志なごり 存りの舞歌萩著 音社

秋の雛粟やぬこの小提重 文虹

志とけ女乃 又落にぬ 北海

思ふく物小はまつく神詣

金牛

跡遠く大い鉢をわく

心樹

卵の花亦此し海竹印行折戸

山帯

晒場へ持つ白を荷作る

冬霞

激の音の一里中申敷大河之

素交

親と白くて子ハ狐父

壺領

人足も鉞かつく順の峯

原

春乃門系千夕月を汲む

秋

植込の花千まきゆきてりまこ

雞

十。 鞠よめさきし冠乃砂

野

扇うせく菓子を懐面小蓋掛へ

社

含く洗ひりつ力條る中

水

志き敷雨とても暮ぬ夜のさし樞

領

志きまて年を古本の虫

交

心ふさうあひやくする曾我具負

樹

カルメラ 露は雪の白山

虹

廣行の歌庭ふ燈蓋の頁より

刺して拂子の胸に傳く

袖摺まゝ貝翫く乃 机

一簾蒔く眉の葉花

賓人の送るうき月尔隈

う 福を押習ふも門の辺

盃を杯の中よりむさうす

弓矢拾く毛楸の下菴

海

牛

霞

帯

紅

樹

秋

難

揆面尔村雨の歌端居し

風乃来るまゝ 無の鞆鞆

言れり祖師を法度と法の集

程漢一くおむまき日

原

水

社

野

六月のあそ月中の六日と師一回忘の遺稿を
いふなるもあつて例の人へを百餘いと
志せらるる法廷西の刻りたるよふお公の軸
をいへまふいせしむる向ひ申揚ふくむる意を
中本よと作あるも一物はあつていふてあつて
難波津にいふていふていふていふていふて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

らの凌雲の額を書し思ひまへち新
此一板千白契と年ん奉といへち當日の
趣をおろくた付るも短き言ふ余りの趣
言す千溢るやうく百のく一を恐る
付る千御床の上辰と公孫の記の大板物
を御まきう世古蹟旧翁幻住庵の序ま
一頃膳所ある人へ贈まきしを其後領主
百とまき祇君御舎すおまきしを譲おる

一軸あり翁のま澤今席上ふ筆と一揮の
おしへる人出ると再と臨る泪乃め雨く
御筋と晋子自画讚の一軸四季ふあせ
て了るみ光陰を志まきく未曾有の物之
名ありおの墨吉乃御文其志志まきまの
御祝萬師款を書きし一栞の雪拭く
の吟もおうのまよふ涼一袂を志かるを
うく次おる曹司より出山の釈迦氏あ

三寸斗の銅佛の尊像は群像ありと枕の
木子余る宸窓の形あり奇楠を彫ハリウカタ鑿カタせ
形ひくたのかた甚重し形も甚水形菓を
如く形ひ世に容の内為各尊ありとま
敏めるる容は清く如く養ありし容は似し
しと仰ありしと如く羅庵の足と此如く佛の
俣せ形も諸ふより叶ひく是を深き仏の
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

侍坐の面くふえを云ぬ調葉の非ぬ儲
形ひくく連中佛形平口膳を満くめかき
是るの日の錯拵志くく浄界に生とく
都卒の内院花幔毘那の中と坐し
ホと一世師は君といふるる去の賢や深き
くんとくくくくくくくくくくくくくく
お後多の御とくくくくくくくくくく
おまの御も知はして恩にの光余ありと

かく後後すて其教を慕はせ給ひ肉縁
親戚も及ばず教生涯に在る所のを以て
よ向給ひと云ふもその廣くは孤獨の
門前我くも極育一もする事言ひて亡
師の前仏已り去てりふい之會の境を傳
ゆるは仏も世君と云ふもさるく師の現
當をさるく唯人よてあつさりたる聲
風拂_レ羅障之雲_ラ三十六句月浮_ル樂

之水_ニとん_テ回向を_お高_き途を_い行_く
奉_じと_あ一_に書_きと_て奉_る

易_の難

安永八巳亥_亥復_六月



